The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	植民地期チリにおける「パルラメント」 : 国王が先住民を接待する酒宴
Author(s)	千葉, 泉
Citation	Estudios Hispánicos. 2007, 31, p. 199-204
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97977
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

植民地期チリにおける「パルラメント」
－国王が先住民を接待する酒宴－

千葉　泉

南米大陸太平洋岸の南端に位置する国チリには、エルシージャ作の普及の叙事詩「ラ・アラウカーナ」に謳われた先住民族マプーチェ（アラウカーノス）がいる。彼らは15世紀のインカ軍、そして16世紀以降のヨーロッパ人の支配に対して頑強に抵抗し、19世紀末の「平定」に至るまで、長期にわたって独立的なテリトリーを保持した稀有の民族である。

彼らの長期にわたる抵抗を可能にした要因の一つはその社会構造にあるが、その社会構造には飲食に関わるある習慣が密接に関係していた。そしてその習慣は、植民地時代において、スペイン王室による対先住民政策にも大きな影響を及ぼすことにもなった。

本稿ではこの飲食に関する習慣と、それが植民地政策に与えた影響について論じる。

1．水平的社会構造と「酒宴」

スペイン人が到来した16世紀の中葉当時、高度に階層化されていたメソアメリカやアンデス地域の先住民社会とは対照的に、マプーチェ民族は水平的な性格の強い社会構造を保有していた。民族全体を統括する王や貴族層の類が不在である一方、地区レベルの首長の権威は象徴的なものに過ぎず、一般住民が租税や労働義務を負うこともなかったのである。

このように水平的な性格の強いマプーチェ社会では、和平や戦闘などあらゆるものごとに関して意思決定を行うためには、地区の有力者が一同に会して合議する必要があった。

チリの征服に参加した兵士ビバルは、1558年に執筆を完了した記録の中で、コンセプシオン市域に住む先住民たちが列席する地区の集会に言及し、次のように記している。

「…そこに集まったところで飲食し、損害を調べ、責任者には

罰を与える。そしてそこで合意したり命じたり、命令を下したりし、このことは遵守される。…」[Vivar: p.266.]

この叙述から、地区に関わる重要な事項については、集会の場に列席した住民たちが、飲食を交えながら議論を交わした上で、決定が下されていたことがわかる。

また、1629年の戦闘で捕虜となった植民地軍の隊長ヌニェス・デ・バスクニャンも、体験を綴った回想録の中で、戦闘捕虜の犠牲から耕作や収穫等の互助労働に至るまで、様々な集いに馳せ参じた先住民たちが、果実を発酵させた発酵飲料チチャ、羊や牛、鳥などの肉、ジャガイモや豆類などを大量に消費する様子を描いている。[Núñez de Pineda y Bascuñán]

それからさらに半世紀経過した17世紀後半のマプーチェ社会を記述したイエズス会のロサレス神父は、次のように指摘している。地区の長が住民たちを集会に召集する場合、充分な量の飲料チチャと食物を準備しなければならない。もし飲食の品が欠けようものなら、出席者たちから「甲斐性なし」のそしりを受け、それ以降無視される憂き目にあうことになる。「なぜなら、和平に関することも戦闘に関することでも、食べたり飲んだりしながら検討することになっているからである…」と。[Rosales, I: p.136.]

このように、スペイン人の到来後一世紀以上が経過した時期でも、水平的な社会構造と飲食を通じた意思決定の手続きは健在であった。そして同時代の記録者たちは、この種の先住民の集まりを、軽蔑的なニュアンスを込めて「酒宴 borrachera」と表現していた。

2．酒宴的合議システム「パルラメント」の誕生

16世紀末に勃発した一斉蜂起によってマプーチェが独立的なテリトリーを回復すると、彼らの社会に特有の意思決定の特徴は、民族の垣根を超え、先住民社会と植民地社会との関係を律する政治システム「パルラメント」の発生を促した。

パルラメントの起源は、17世紀初頭に植民地当局が、フロンティア近辺に位置する、少数の地区の先住民代表者たちとの間で結んでいた「局地レベル」の和平交渉にあった。[1] その後、王室がマプーチェ地域の征服を事実上放棄した1641年のキジンの和平[2]以降、先住民テリトリーのほぼ全域を網羅する、いわば「全域的パルラメント」へと変容した。

さらに18世紀に入ると、パルラメントは非常時における和平の締結のほか、平常時における和平の批准と両社会間の軋轢の解消等、より多様な機能を付与され[3]、植民地社会とマプーチェ社会の間の良好な政治関係を維持するための儀礼装置として制度化され、歴代の総督たちの手で定期的に開催されるようになった。[4]

この時期のパルラメントには、マプーチェのテリトリーを形成する多数の地区からそれぞれ首長以下数名～数十名のものが参加し、先住民出席者の総数は毎回千名以上、時には三千名近くに達する場合すらあった。[Villalobos: pp.210-221, Méndez Beltrán: p.148, León (1993): pp.12-16.]

両社会の境界近くの平地に設けられた会場で、懸案に関する討議が行われた後、先住民列席者一同には大量の食物やアルコール飲料が振舞われ、数日から一週間にわたる一大酒宴が繰り広げられた。その際には、牛や羊そして鶏の肉、小麦や小麦粉などの食糧、ワイン、アグアルディエンテ（ブドウの蒸留酒）といった飲料、そして塩・トウガラシなどの調味料等々、多様な食材が食卓を飾るのであった。[Méndez Beltrán: p.145.]

ところで、これらの食糧や飲料を準備するための費用は、全面的にスペイン王室が負担していた。1703年には、王室勅令により、植民地軍予算の中に先住民を接待するための予算（接待費 ramo de agasajo）が正式に設けられ、王室が先住民に対して「大盤振る舞い」を行う習慣が制度化されたからである。[Méndez Beltrán: pp.139-140, Olivares: pp.85-86.]

アステカやインカをはじめ、新大陸の名だたる先住民集団を支配下に収めたスペイン王室が、屈辱的とも思えるこのような制度を受容したのは何故であろうか。

16世紀にチリに到来した征服者たちは、新大陸の他の地域と同様、武力を通じてマプーチェのテリトリーを占領し、集住や労働徴発など全く異質のシステムを強要した。その結果、先住民側の頑強な反抗を招き、一斉蜂起によって征服の試みは完全に失敗に帰した。

この苦い経験に基づき、17世紀以降、先住民に独立的なテリトリーの保有を認めた王室は、定期的にパルラメントを開催し、「飲食を振舞う気前のいい接待者」を演じるようになった。彼らの好感を勝ち取ることで、間接的に影響力を増進するという戦略に転換したのである。

1769年の反乱終息後に開催された1771年のパルラメントの際、戦闘状態を意味する焚き火の炎は、ワインの雫で消された。また、1791年のパルラメン

トの閉会時には雄牛が丸ごと一頭焼かれ、ワインの壺を手にした列席者がこれを共に食し、一体感を強化した。[Méndez Beltrán: p.151.] 1641年の和平の際には、先住民の伝統的流儀に従ってリャマが屠殺され、一同がその心臓を分かち合っていた[5]のと対照的に、この種の儀礼的行為にヨーロッパ産の品々を忍び込ませるという手法は、植民地当局者の巧妙な意図を象徴している。

こうした王室の戦略は、奇しくも植民地時代が終焉を迎えようとしていた状況下で、その有効性を証明することになった。19世紀初頭にスペインからの独立を求める戦いが勃発した際、その阻止を目論む王党派の呼びかけに大半の地区のマプーチェ集団が応じ、チリの独立派勢力に対して数年に及ぶ死闘（「決死の戦い」）を展開したのである。[Mackenna, Guevara]

3．現代先住民闘争とパルラメントの記憶

スペインからの独立後、約半世紀経過した19世紀の後半、近代化の推進と「内なる野蛮の抹殺」を国是に掲げたチリ国家の手で「平定」が決行される。その結果、マプーチェはテリトリーの大半を喪失し、以後、狭小な共同体の中で生活することを余儀なくされた。

それから一世紀経った1990年代以降、テリトリーの回復を目指すマプーチェたちの闘争が各地で激化している。彼らの意識の中では、チリ国家が実行した「平定」が極めて否定的に認識される一方、スペイン王室が定期的に酒宴的集会「パルラメント」を開催し、先祖たちを歓待していた「平定」以前の時期については、「回帰すべき黄金時代」として肯定的な記憶が残っている。この事実は、長い軍政の末に民政移管を果たし、マクロ経済の側面で一定の成功を収めた現在のチリ国家にとって、「開発の促進」と「先住民族の権利の尊重」という二つの課題をいかに両立させるかという問題に関する教訓を呈示している。

<注>

1. この時期の局地レベルの和平については *Manuscrito Medina,* Vol. 118, Pieza 2062: Fojas 5-43, Rosales, II: p.786, Zapater: pp.68-75, Ruiz-Esquide Figueroa: pp.26-27. 参照。
2. 「キジンの和平」については、Rosales, II: pp.1131-1138. 参照。
3. Olivares: p.83, Perez Garcia, I : p.65.
4. 18世紀のパルラメントについては、Méndez Beltrán, León: 143-160. 参照。

5. Rosales, II: pp.1137-1138.

<参考文献>

Ercilla, Alonso de, *La Araucana*, Santiago de Chile, Editorial del Pacífico, Santiago de Chile, 2ª edición, 1970.

Guevara, Tomás, "Los Araucanos en la revolución de la Independencia", en *Anales de la Universidad*, Imprenta Cervantes, 1911, pp.217-641.

León Solis, Leonardo, *Maloqueros y conchavadores en Araucanía y las Pampas, 1700-1800*, Ediciones Universidad de La Frontera, Temuco, 1991.

León Solis, "El Parlamento de Tapihue, 1774", en NÜTRAM, Año IX, N° 32, Santiago de Chile, 1993.

Mackenna, Benjamín Vicuña, *La Guerra a Muerte*, Editorial Francisco de Aguirre, Buenos Aires, 1972.

Méndez Beltrán, Luz María, "La organización de los parlamentos de indios en el siglo XVIII", en Villalobos, Sergio y otros, *Relaciones Fronterizas en la Araucanía*, Ediciones Universidad Católica de Chile, Santiago de Chile, 1982, pp.107-174.

Núñez de Pineda y Bascuñán, *Cautiverio Feliz*, Editorial Universitaria, Santiago de Chile, 1989.

Olivares, Miguel de, "Historia militar, civil y sagrada del reino de Chile", en *Colección de Historiadores de Chile*, tomo IV, Santiago de Chile, 1864.

"PACES DE PAICABI (1605)", *Manuscrito Medina*, Vol. 118, Pieza 2062, Fojas 5-44.

Pérez García, *José, Historia de Chile, tomos I y II*, Historiadores de Chile y de documentos relativos a la historia nacional, Tomos XXII y XXIII, Imprenta Elzeviriana, Santiago de Chile, 1900.

Rosales, Diego de, *Historia General del Reino de Chile, Flandes Indiano*, Tomos I y II, Editorial Andrés Bello, Santiago de Chile, 1989.

Ruiz-Esquide Figueroa, Andrea, *Los indios amigos en la frontera araucana*, Centros de Investigaciones Diego Barros Arana, Santiago de Chile, 1993.

Villalobos, Sergio, "Tipos fronterizos en el ejército de Arauco", en Villalobos, Sergio y otros, *Relaciones Fronterizas en la Araucanía*, Ediciones Universidad Católica de Chile, Santiago de Chile, 1982, pp.175-221.

Vivar, Jerónimo de, *Crónica de los reinos de Chile*, Historia 16, Madrid, 1988.

Zapater, Horacio, "Parlamentos de paz en la Guerra de Arauco (1612-1626)", en Villalobos, Sergio y otros, *ARAUCANIA, Temas de Historia Fronteriza*, Ediciones Universidad de La Frontera, Temuco, 1989, pp.47-82.